

さん喬師匠からの贈り物

お買物カード



10月のある日、私の事務所に大きなダンボール箱が宅急便で届きました。大きさのわりには軽めの箱で、差出人は友人の落語家・柳家さん喬師匠でありました。

こんな大きな箱に、いったい何を送ってくれたのだろう。さっそく開けてみると、中身のほとんどは、

白地の紙袋でした。その上に、包みが一つ。中から10センチ角以上もある大きなゴムスタンプと、緑色のスタンプ台が出てきました。スタンプは「福祉バンク」の文字と、そのまわりに楽しい人垣が描かれており、手紙が添えられていました。

「決して押し付けがましい気持ちでお届けしたものではありません。実は、この前、福祉バンクのお店でジーパンをもとめました。店員さんは、スーパーの紙袋に入れてくださいました。きっと不用の紙袋を皆さんで持ち寄って使っておいでなのだと思います。それは、福祉バンクのリサイクルの精神に添ったことで素敵なことだと思いました。でも、その袋に「福祉バンク」のスタンプを押して使ったならば、もっとよいのかもしれないと勝手に思って、つい作ってしまいました。それは、とても余計なことなのかもしれません。ですので、もし、お気にめさなければ、どうぞ処分して、せめて袋だけでも使ってください。私は、決して気にしません。本当に余計なことと怒らないでください。ごめんなさい。——さん喬。」なんてうれしい贈り物でしょう。

永六輔さんの提案で「そば屋寄席」が始まってから、かれこれ15年にもなります。さん喬師匠は、柳家小三治師匠のおとうと弟子で、盛岡に来演し始めたころは、まだ若手真打ちのホープの一人でしたが、今では古典落語の名人として3人の内弟子を持つ師匠になっております。

落語の付き合いだけでなく、盛岡での私の活動に、いろいろ関心をもってくれ、折につけチャリティ寄席やオークション、また、いきいき牧場の後援会（風の村民）にも入会してくれております。

一度使った紙袋を捨てないで集め、再利用する、それだけでリサイクルしている気持ちでいたスタッフたちは、さん喬師匠からの贈り物に込められた心遣いに、本当のリサイクルを教えられたのです。リサイクルは、再利用という形だけではなく、捨て去られる物への温かい心を込めて、もう一度命を吹き込む活動なのですね。



紺屋町店の入口の看板

(平成8年11月18日 盛岡タイムス 「われら共に生きる」 文 馬場勝彦より)